



TITLE:

米洲行日誌(11)

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 米洲行日誌(11). 天界 1938, 18(205): 218-225

ISSUE DATE:

1938-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167657>

RIGHT:

米 洲 行 日 誌 (11)

京都帝大教授 山 本 一 清

1937年7月6日(火曜日)

朝4時に起き、5時半、昨日の飛行機“サンタ・マリヤ”號で薄暗い飛行場を出發した。フォセト機に比べて、此のシコルスキ機は構造も、内部の設備も格段の相違がある。危険などいふ念は少しも起らない。御座敷が其のまゝ空に浮んでゐるやうな感じである。乗客定員14名、飛行士2名、ボーイ1名が乗り込んでゐる。座席は柔かく、音響も高くない。ゆつくり讀書も出来る。高さは平均3000米ぐらゐな所を飛んでゐる。食事は適當な着陸地で認める。

今日は、ガヤキル出發後、コロンビア國のトマコとブエナビスタとに30分づつ着水し、13時半、パナマ地峽を越えて、無事にコロンの着陸。暫く此のコロンクリストバル市に休息した後、16時50分に汽車で出發、18時半パナマ市に着き、迎へられて海本領事の官宅に入つた。

夜、領事夫妻、天野氏等と日食の話などする。

7月7日(水曜日)

ペルメでは全く見なかつたが、此のパナマでは終日驟雨がやつて来る。朝食後、海本領事夫妻に案内されて古パナマの破壊された教會堂の跡など見、それから市内外をドライブした。午餐は少し早く頂き、送られてバルボア港に入港中のサンタ・ペーバラ號に乗り込んだ。カヤオから既に乗り込んでゐる柴田・堀井兩君は天野氏に連れられて一時間ばかり上陸し市中をドライブした。

船は13時にバルボアを出帆し、パナマ運河を通過する。自分は昨日此の邊りを、飛行機で飛び、又、汽車で歸つて來たので、こんど船で通過するのが、3度目の通過であるわけだが、三つとも皆趣きが違つてゐて、面白い。幾つかの閘門、切り割り、天然の湖、人工の湖、瀧、川など、船の速度も速かつたり、遅かつたり、非常に變化が多い。50哩の運河にも案外長い時間を費して、クリストバル港に入つたのは22時50分であつた。碇泊時間が可なりあるので、三人で上陸し、夜半の街路を散歩したが、まもなく歸つて眠る。

ニ
ウ
ヨ
ー
ク
市

去七月4日、チウリヒのフィンスラー氏が一新彗星を発見したといふニュースが新聞に載つてゐる。又、或る人に聞けば、吾々の観測生活をフィッシャー博士が撮影した活動映畫が、既に數日前此の市中の常設館でニュース・リールとなつて上映されたといふ。

7月8日(木曜日)

船は今朝4時50分にクリストバルを出帆、一路ニウヨークに向ふ。

7時半に起床して、船の中をうろつく。

正午の船の位置は西經 $78^{\circ}57'$ 、北緯 $11^{\circ}03'$ 。風は東北東。

7月9日(金曜日) 晴れ。正午の船の位置は西經 $76^{\circ}14'$ 、北緯 $16^{\circ}07'$ 、昨日よりの航程343浬、時速14.3浬。ニウヨーク迄は1497浬。

のん氣に本を読んだり、日誌をかいたり、夜21時から甲板で活動映畫がうつされたりした。波はおだやか。

7月10日(土曜日) 正午の船の位置は西經 $74^{\circ}20'$ 、北緯 $21^{\circ}52'$ 、昨日よりの航程382浬、時速15.9浬。ニウヨーク迄は1115浬。

今吾々は西インド列島を抜けるところで、今日晝の間は朝から夕まで Ank-

lin 島が右舷に近く見えてゐる。夜は左舷にワトリング島の燈臺が手に取る如く見える。ワトリング島は昔しコロンブスが發見したサン・サルバトル島だと言はれてゐる。して見ると、今吾々が通つてゐる海のあたりは、1492年10月11日の夜、(島の發見の前夜)、コロンブスが“何だか、火が見える”と言ふ水夫の聲に心を躍らせて、船の進行を止め、夜の明けるのを待つた其のあたりの海上である。

船では15時半に子供祭が催される。吾々は3人が集つて、北米旅行の計畫を相談した。事務長の厚意により自分は第44號室から第31號室に移る。

7月11日(日曜日)。正午の船の位置は西經74°23′, 北緯28°11′。波は非常におだやか。昨日よりの航程379浬。時速平均15.8浬。ニウヨークまでは736浬。

朝10時半、サロンにて禮拜があり、アライアンス派の E. A. Prentice 牧師の説教があつた。式後、自分は同牧師と話した。氏はカナダのトロントの人だと言ふので、トロント市外リチモンド丘の新天文臺の位置など聞く。氏は宿のことなど種々親切に話され、又、同派のニウヨークとトロントとの未知の牧師へ紹介狀を書いて貰つた。

15時、例によつて船火事の演習があつた。20時、御別れの晚餐。

7月12日(月曜日) 正午の船の位置は西經74°28′, 北緯34°21′, 昨日よりの航程370浬, 平均時速16.09浬。ニウヨークまでは366浬。

今朝、時計が1時間進められて、ニウヨーク市中の夏期時刻と同一になつた。明日上陸なので、皆、荷作りなどで忙しい。夜にはそれも終つて、甲板で競馬遊戲が催される。

7月13日(火曜日)

どうしたものか、船はニウヨーク港外まで来て、急に速度をゆるめ、岸壁に着いたのは14時であつた。港外は波がおだやかであつたが、もやと霧とで、遠望が利かず、スカイ・スクレーパの林立する壯觀も少々失望的であつた。

上陸して、税關検査も簡単にすみ、取り敢へず第74番街のキンパリ1ホテルに入る。午後は日本總領事館を訪れ、それから改曆協會、中央停車場、等々を見、22時半に歸宿した。中々暑い。

7月14日(水曜日)

朝10時、ホテルから近くにある天然理學博物館に行き、數年來此の中に新設されたヘイデン・プラネタリウムを訪ねた。ワンチャコで日食觀測を共にやつたフィッシャー博士は不在であつたが、しかし觀測隊員であつた Barton氏、Adamson氏、Bennett 女史等に會ひ、バートン氏はドームや廊下の陳列品等を詳細に案内された。ドームの中の星の投影器は勿論大阪のものと殆んど同じであるが、しかし細かい所は可なり變つてゐる。スキチ板などは、ロスアンゲレスのものと同様に、多少舊式であるが、其の他に於いては此のニウヨークで改良の施された部分も少なくない。例へば朝の日の出と雲の景色など美事である。しかしオロロラは、餘りこり過ぎて、少々失敗に近いと思ふ。星座の名は全部取り去り、星座の圖畫を別々に投影する仕掛けになつてゐるが、畫圖は手製で皆拙である。手で持つ指示燈の明暗の加減は非常に良い。此のプラネタリウムでは以前の頃からの引きつづきで大きい隕星を澤山集めて、陳列してゐるのは世界第一で、全く羨しい限りであり、尙ほ、アリゾナ隕星坑からの隕鐵の小片を賣店で賣つてゐる。又、別室には太陽系の模型を、天井から吊り下げた形で、運轉してゐるのは非常に良い構造と思ふ。一般入場者の入場料は15仙で、講演は午後に數回と、夜に1回とである。

此の日、午後、三人で下町へ行き、パテリ公園を散歩した。

夜、京都へ國際電話をかけたが、空電が多くて、非常に聞こえにくく、時間を費した。

7月15日(木曜日)

午後、キンバリーホテルから、同じ町筋の國米に移る。

ニウヨーク・タイムス紙を見ると、ハーバード大學天文臺の W. A. Calder氏が最近の研究發表中に、プレヤデス星群中の Pleione 星の光輝が變動することを確かめ、これが昔から多くの民族間に言ひ傳へられてゐる“見失はれた一人のニンフ”でないかと言つたやうな思ひ付きを述べてゐると記してゐる。プレヤデスの光輝研究の目的で撮つた寫眞原板は1914年來澤山保存されてあるので、歸朝してから調査して見ようと思ふ。

7月16日(金曜日)

10時、ダウンタウン第五街のプレスビテリアン教會中央事務所に、魚木教授

の紹介で Syroka 女史を訪ね、更に同女史から紹介されて、隣室の Hallock 女史にも會つた。Rockfeller 當主に會ひたいと思ふのだが、暑中で遠方に避暑旅行中の由で、ダメらしい。

フィンスラ 彗星が北天を運行してゐるので、新聞記事にも評判は高い。8月上旬には光輝も増し、距離もよほど近くなるらしい。

7月17日(土曜日)

午前中、獨りで宿から近いコロンビア大學を訪ねたが、天文臺の主任シルト教授は北方へ旅行中であるといふので、只、外部から屋上のドームを見ただけで引き上げた。此のドームと、其の中に納まつてゐる20時の赤道儀は比較的新しいもので、近年死なれた Jacob 教授の置き土産であるが、しかし構内の片隅には今尚ほ昔しの小さいドームと子午線室が残つてゐる。之れは近々に取りこはされるらしく、既に入夫が入つてゐる模様である。

午後、暑いので、涼みかたがたプラネタリウムへ又出かけた。冷房がしてあるので、甚だ良い。しかし、今日もフィッ氏は不在であつた。

7月18日(日曜日)

柴田堀井兩君をコロンビア大學構内へ案内して置いて、自分は約束により10時より Syroka 女史と共にリヴサイド通りのバプテスト教會へ禮拜に行つた。丁度今日はフォスデク牧師の夏期説教の第一回で Dignity of Being Up-to-Date といふ題で、明快に話された。式後、同牧師に會ひ、それから教會の高塔に登り世界一のベルを見、又建築の内部を詳細に案内された。正午にはユニオン神學校食堂に入り、午後は女史と共にハドソン河を川上ヘトライオン公園まで散歩し、16時頃に歸宿した。

7月19日(月曜日)

朝9時40分(標準時) Greyhound のバスで三人がニウヨークを出發、プリンストン、トレントン、フィラデルフィヤ、ボルチモア等の市街を経て、19時20分にワシントンに着。パークサイド・ホテルに投宿した。車中、可なり暑かつたが、種々の意味に於いて良い経験であつた。

7月20日(火曜日)

朝10時、車を雇つて、3人は先づマサチューセツ通りの日本大使館を訪れ、其れ

から眞つ直ぐに海軍天文臺を訪ねた。幸ひロバートソン博士やリウイス夫人も居られ、副主任とも言はれるブルワ博士に會ひ、暫くペルイの話などした後構内の諸設備を參觀した。最初に報時部、次で“26吋”赤道儀、“6吋”レプソルト子午環、“8吋”ピストル・マルチン子午環、寫眞天頂儀、“40吋”リチー・クレチアン式反射鏡、“15吋”天體寫眞儀の順であつた。中にも最後の二つ、即ち“40吋”反射鏡と“15吋”寫眞儀とは最近年に据え付けられたもので、非常に教へられる所が多かつた。リチー・クレチアン式反射鏡は視野が廣くて、焦点が屈曲してゐるため、乾板を氣壓で曲げる装置であるが、之れで、數日來フィンスラ彗星の寫眞撮影をしたとかで、其の乾板を別室で見せられた。去る6月8日の皆既日食觀測のため此の天文臺主任 Hellweg 大佐や Willis 氏等は遙々 Canton 島まで出かけたのであつたが、Hellweg 大佐は“漸く昨日歸つて來ました”といふ挨拶と共に御目にかゝつた。又、若い Willis 氏は立派なコロナ寫眞原板を見せられた。吾々も亦ワンチャコで撮つた内部のコロナの陽晝を1枚寄贈した。

正午過ぎ、リウイス夫人の車に送られて宿に歸る。

7月21日(水曜日)

午前中、3人でポトマク河の堤上の日本櫻を見、それから議事堂の内外を見物した後、國立圖書館を參觀し、自分は理學史家ブラシ博士にも會つて、再會の挨拶と種々の話しを交した。

午後は自分獨りでカーネギー學院を訪ひ、歡待せられて、エイトケン博士の二重星目錄1部を頂いた。又、其の後、National Geographic Societyを訪ひ、會々同所に勤務してゐられる村山順氏に會して、川村教授の話などした。此の會の陳列室は廣くて、誠に見事である。

7月22日(木曜日)

朝9時發の汽車で、11時25分にフィラデルフィヤ着。京都にかつて來たことのある Haworth 氏を訪ねて YMCA に至り、此所にとまる。

午後は13時41分發の地方列車で、郊外のスワースモア大學天文臺を訪ひ、ミラー名譽臺長や Mohler 氏等に會ひ、ドーム内にある“24吋”赤道儀を見た。之は今グレーティングを使用しつゝ光電光度計による研究が、恒星視差研究と共

に行はれてゐる。暑い日であつたが、研究室でミラー博士等と、ペル１の日食の話をした。博士もペル１へ観測に來られる筈であつたが、病氣のため中止せられたのだといふ。

吾々３人は、博士に連れられ、大學構内の舊天文臺を見た後、其の私邸に案内せられ、晚餐を饗せられ、日没頃、汽車で費府に歸つた。ミラー博士と自分とは、米國でも、日本でも、スマトラでも、何度も會つたことのある馴じみであるが、夫人は數年前に逝去せられたといふ。

7月23日(金曜日)

朝10時、宿の近くのフランクリン學院内にあるフェルス・ブラネタリウムを訪ねた。主任 J. Stockley 博士及び職員 Schlesinger 氏に迎へられ、ドームや、天文諸理學關係の陳列を詳細に案内せられる。此のブラネタリウムは米國內第2のもので、ドーム内の投影機は、多少特徴のある改良も施され、中にも極光や薄明の現象や、星座圖などに苦心が拂はれてゐる。別室の陳列品の中には時計の種々の型があり、又、一般人士のために光學品の工作室が作られてゐる。尚ほ此の天文部は、ロスアンゲレスのと同様に、望遠鏡で人々に天體を觀望せしめるため、ツァイス製の“10吋”赤道儀と、フェカ１製“24吋”反射鏡とが据えられ、之れ等は毎夜公開されてゐる。望遠鏡の室はドームでなしに平たい上り屋根なものも珍らしいと思つた。

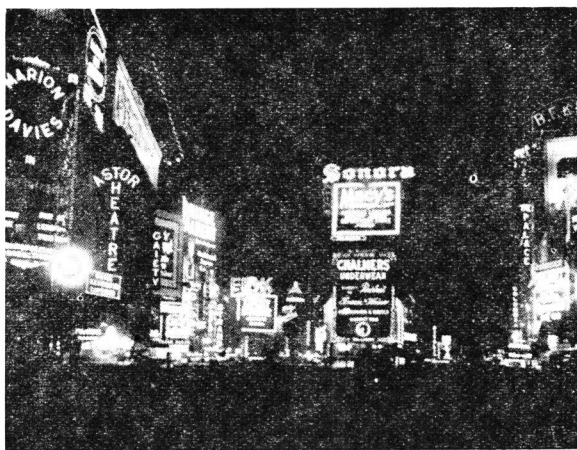
一通り參觀した後、正午には大學集會所で饗應せられ、其の後、ストクリ博士に案内されて、先づ郊外の Upper Darby 村にあるペルシルヴェニア大學所屬“フラワ１天文臺”を訪ねた。臺長 Olivier 博士は不在であつたが、Barton, Taylor 兩氏に會ひ、“18吋”赤道儀や、子午環や、天頂儀を見た。すべて、型は舊式で、只、赤道儀のみが楔形光度計と共に今は使用せられてゐる有様であるが、オリギヤ臺長が流星の専門家であるから、止むを得ないものか！しかし天頂儀は昔し Doolittle 臺長が緯度變化の觀測に用ひた有名なものである。

この天文臺を見た後、更にストクリ博士は吾々を Wynnewood 村の有名な Cook 氏の私立天文臺に案内された。主人 Cook 氏は目下重病で會へなかつたが、令嬢と、天文臺主任 Mohler 氏が内部設備を詳しく案内された。主な器械は“24吋”フェカ１製の反射鏡（焦點比4½、又型、籠式）、“6吋”ロス玉の廣

角天體寫眞儀(全紙大の乾板使用)、クク氏自製の子午儀、水平式太陽寫眞儀(シデロスタト鏡は口径24吋)、小型分光太陽鏡等であつて、皆實によく活躍してゐる。天然色寫眞の巧みな應用も感嘆させられた。此の充實した天文臺は、殆んどアマチュアの域を脱した優秀なもので、米國でも此の種の隨一と考へられる。

ちなみに、聞く所によると、ストクリ博士は、去る六月8日の皆既日食を見るため、プリンストン大學天文臺の Stewart 博士と共に、先づハワイへ行き、ホノルルからパナマへ直航する貨物船 Steelmaker といふ船に乗り合はせて、丁度日食の日にホノルル港の東南約 200 哩ぐらゐの點で、航海中に皆既日食を見たのだといふ。其の點では皆既の時間が7分02秒と計算されてゐたが、船の速度のために更に4秒時だけ延びて、結局、觀測し得た皆既時間は7分06秒であつた。之は實に今日までの長い皆既時間の世界的記録であると、氏等は誇つてゐるが尤もな話である。今後も、多分此のレコードを破る人は近い將來にはあるまいと思はれる。しかし、何ぶん船の上のことで、氏等は小型の寫眞のほか、コロナの撮影は、しなかつた由である。

17時、フェアモント公園を通りぬけて吾々は一旦フィラデルフィアの宿へ歸り荷物をまとめて、18時發の汽車に乗り、21時にニウヨーク着市内で食事をすまして、23時國米に歸着した。



ニウヨークの夜景

太陽面に巨大な黒點が現はれたと言つて、新聞は大ニウスを出してゐる。(つづく)

締切變更。編輯の都合で本誌の原稿・寫眞及び廣告の締切を毎月25日(特に急なものは月末)に變更いたします。